

しらかべ

2020年3月19日 人権・同和教育部発行



2019年度も残り1か月というところで、新型コロナウイルス感染拡大防止のための突然の一斉休校となりました。生徒の皆さんや私たち教員は、学年末考査を終えて、今年の学年を締めくくる授業や行事に取りかかろうかというところでした。春休み明けには皆が再び元気に顔を合わせられるようになることを祈るばかりです。

2学期の人権だよりの冒頭の言葉と同様の話題になりますが、この新型コロナウイルス感染拡大の事象を見ると、ハンセン病の人権課題を思い出すにはいられません。本校でも1年生の人権・同和教育LHRでハンセン病について学習しています。日本社会でハンセン病の患者さんや回復者の皆さんに対し、たいへん厳しい差別が行われてきたこと、そして差別は間違った知識にもとづく偏見によって生み出されるということを学習しました。ハンセン病の人権課題から学ぶことは、決して「昔の問題」ではありません。このような新たな感染症の問題が引き起こされた際に、思い起こすべき重要な教訓となると思います。新型コロナウイルスについてはわかっていないことばかりですが、誤ったデマや情報に踊らされず、社会を見る目を持つことが大切であると強く感じます。

今号では、1月15日に実施した1年生対象の人権講演会と、1月22日に実施した1、2年生の人権・同和教育LHRの取組、そしてこれまでにいただいた保護者の皆様からの返信について、お伝えします。

★ 1年生 人権講演会 廣瀬 悠さん 順子さん 「二人で乗り越えた障がいとパラリンピックの壁」

今回の人権講演会では、パラ五輪リオデジャネイロ大会にご夫婦で参加した、愛媛県にお住まいの廣瀬悠さん、順子さんを講師にお招きしました。お二人とも高校生や大学生の時に視力が低下して弱視となりましたが、それまで行ってきた柔道を続け、パラ五輪に出場するまでになりました。パラ五輪の出場体験などの楽しいお話に加えて、それまでの練習や生活を送る上でのご苦労、障がい者を取り巻く社会の課題についてお話しくださり、生徒一同1時間半にわたるお話に引き込まれていきました。この講演を通して、お二人で出場を目指す東京パラ五輪が身近に感じ、お二人を応援しようという気持ちが盛り上がってきました。



(写真) 柔道部員が呼ばれて前に。タオルで目が見えないようにして、順子さんに挑む。

《生徒の感想より》 ▲私が特に印象に残った話は講演の最後の順子さんの話です。病気になってから気づいた幸せについてや後悔しないように夢を追うことなど、これからの私にとっても大切な話でした。今の、普通に学校に行って友達と話ができて私の生活は、とても幸せなんだなと思いました。毎日大変で疲れるけれど、それは幸せの中にあることで、家族や友達に感謝したいと思いました。夢はまだはっきりと持っていないけれど、自分の中で目標を決めることができました。今の努力を大切に、将来の自分をしっかり考えたいです。今回の講演で、私はオリンピックやパラリンピックに興味を持ち、障がいのある方のことを考えることができました。今日の話をお忘れずにこれからの生活を送っていきたくです。

▲今回、廣瀬悠さんと順子さんのお話を聞いて、障がいについて考えを改めることができたのではないかと思います。前半、お二人はどちらかというとも明るい話題や雰囲気でお話していましたが、後半で障がいやご自身たちの病気などについて話されていた時には気さくな様子で話されていた悠さんがものすごく真面目な口調で日本の現状について語っていたのを聞き、廣瀬さんご夫婦も体験した重大なことなんだなと意識させられました。話の中で悠さんが「世の中は住みにくいですね」とおっしゃっていました。前々から知ってはいたものの、日本と世界ではバリアフリーの考えの広がりや取り組み方がまるで違うのだということ、日本人は何に対しても遠慮しがちで、見知らぬ人に関わることのリスクを考えてしまうという短所、その実態を熱意ある言葉で聞き、心に深くさざりました。

★ 1年生 人権・同和教育LHR 「インターネットと人権」

3学期LHRではインターネットと人権について「あの空の向こうに」という短編ドラマを視聴して行いました。あまりにも携帯電話、スマートフォンが身近なものになってしまい、その危険性についてどうしても注意が薄れがちです。自分自身が、加害者にも被害者にもなりうることをいつも心に留めていなければなりません。

《生徒の感想より》 ▲自分のちょっとした考えが必ず肯定されるという保証はなく、それに対して不快に思う人もいるということに改めて気付かされました。▲相手の顔を見て話すのも、メールでやりとりするのも、相手の気持ちを考えてから行う大切さがよく分かりました。▲軽い気持ちで投稿したことから簡単に個人情報特定されてしまい、怖いと感じました。▲何かがあったときに相談できる家族や友達、先生がいることも大切だと思いました。▲主人公が「人と直接話すのはめんどくさい、わずらわしい」と思っていたのは一度ネットの便利さを知ってしまったからだと思う。ネットはトラブルも増えるし、祖父の言うように少々煩わしくてもその分相手のことがよく分かるので直接話すことも大切だと思った。

★ 2年生 人権・同和教育LHR 「部落の歴史Ⅱ ～ 高松差別裁判事件から学ぶ ～」

2年生3学期のLHRでは、1933年に起こった高松差別裁判事件から、結婚差別について学習しました。この事件は、被差別部落出身の若い男性が女性と知り合い、結婚を約束して一緒に生活をするようになったことに始まります。しかし女性の父親が自分の娘が誘拐されたと警察に通報し、男性が逮捕されました。裁判の結果、男性に対して差別的な有罪判決が下されました。当時、この判決を機に全国的な抗議運動が展開され、戦後、政府はこの裁判について謝罪しました。そして、後に憲法の人権に関する条文にも影響を与えました。LHRではこの裁判がどのような社会的な背景のもとで行われたのか、今の自分たちならどのような判決を下すかなどについて、考えながら進めていきました。

《生徒の感想より》 ▲実際に部落差別が行われた具体的な事案をとりだして考えてみることで、より深く考えられたように思います。今考えるとどう考えてもおかしいし、逆に何の罪で有罪にできるのだろうと思うくらいなのに、今から百年もたたない前の日本でこんなことが行われていたということが驚きでした。▲自分たちはクラス全員が無罪としたけれど、これがもしその時に問われたことだとしたら、私たちはどのような判決を下すのだろうか。私たちは人権学習を小学校から高校までの間、ずっとしてきて、差別はだめなことなんだ、部落のことや病気のこともいろいろなことで差別されて苦しんでいる人がいるということを知っているからこそ無罪と書くことができたと思います。

★ 保護者の皆様からの返信より

今年度もたくさんの保護者の皆様から、人権だよりや本校の人権・同和教育についてのご感想やご意見をたくさんいただきました。今号では「LHRの生徒感想を読んで」の中から、いくつか掲載させていただきます。来年度も返信用紙を添えて人権だよりをお配りいたしますので、ご感想やご意見をぜひお寄せください。



▲“差別されている人を「自分じゃなくてよかった」と思うのは、差別をしている人と同じではないかと思う”とありました。私自身はどうなのか、考えてみようと思いました。▲地域柄、ハンセン病のことをよく耳にするので、子どもが学んできたことをまた聞かせてもらおうと思います。▲1～3年生の感想を読み比べてみて、継続的な人権学習により、生徒の人権感覚や差別に対する理解がより深まっていると思いました。▲私が学生の頃、部落差別の学習をした際、当時は差別を身近に感じたことはなく、知らない方が差別がなくなるのでは？と思ったこともありましたが、しかし学習することによって事実を知り、歴史を知り、自分たちの行動をこれからどのようにしていけばいいのかを考えるようになりました。生徒たちもいろいろと考えてほしいと思います。▲社会に出ると、いろいろな差別に気づくことがあると思うので、それに対してどのようにするのがよいか、考える機会になったと思います。▲同和教育、人権教育は知ることから始めなくてはならないと習いました。これは自分に関係ないからではなく、まず知ることから。今回、3学年それぞれのことを知り、生徒が社会の今のあり方を見つめて感じて考えていることに、本当に大切なことを学ばせてもらっていると感謝しています。